

第4章 近代和歌山の発展



和歌山県の成立



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
明治・大正・昭和(戦前)時代	
昭和(戦後)・平成時代	



カール・ケッペン

カール・ケッペンと交代兵

1869（明治2）年、藩主徳川茂承は版籍奉還を申し出て認められ、和歌山藩知藩事に任命されました。

和歌山藩では、津田出が徳川茂承に命じられて藩政改革に取り組みますが、1869年10月、プロイセン（ドイツ）のカール・ケッペンは、「交代兵」という徴兵制の軍隊をつくることを津田に提案しました。ヨーロッパの強国プロイセンの兵制を参考にしたのです。1870年に定めた「兵賦略則」は、身分の別なく、20歳になった男子を検査し、合格した者から兵役につかせるようになっていて「交代兵」は、1873年に明治政府がつくり出そうとしていた徴兵制にさきがけてつくられたのです。

や長距離の行軍に不向きなわらじを洋靴に改める必要がありました。そこで外務省に願ひ出て、プロイセンから靴製造の技師を雇い入れました。洋靴の原料となる皮革は、1874年に友ヶ島へ牛の牧場を設けて供給することにし、牛肉を兵士の食料にしました。同年に始まった「西洋沓製法伝習」は、のちに和歌山の地場産業となる皮革産業になり、また兵士の軍服の整備にともない、「紀州ネル」（綿ネル）の主産地へと発展しました。しかし、「交代兵」は民衆にとってたいへん重い負担で、反対運動も起こりましたが、廃藩置県の実施によって廃止されるまで続きました。

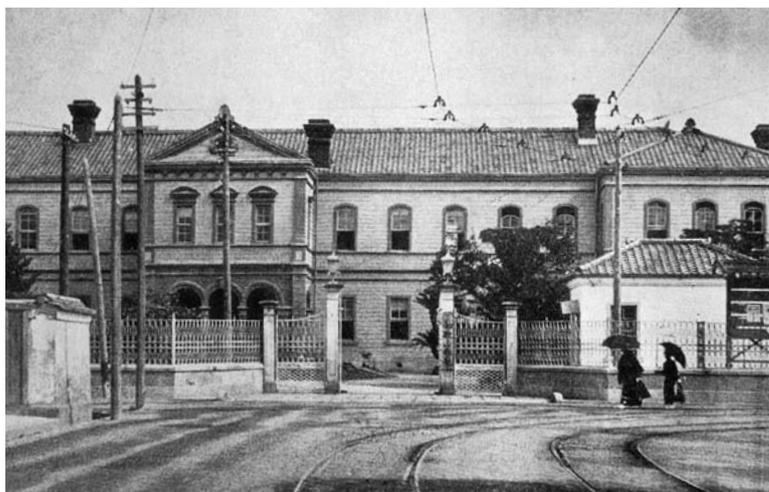


紀伊徳川洋式演武之図（和歌山県立博物館蔵）

廃藩置県と和歌山

1868年10月、紀州藩は和歌山藩・田辺藩・新宮藩の3藩に分かれましたが、1871年7月、廃藩置県により和歌山・田辺・新宮の3藩は、和歌山県・田辺県・新宮県となりました。江戸時代まで、高野山寺領であった地域は、1869年8月に堺県、1870年4月に五條県と所属を変えながら、1871年11月に和歌山

県に統合され、伊都郡と那賀郡に分かれて入りました。また田辺県は、全域が、新宮県は新宮川（熊野川）と北山川の右岸の部分が和歌山県に統合され、左岸は度会県（三重県）になりました。そのため牟婁郡の一部（現在の三重県の南・北牟婁郡）が度会県になりました。このように紀伊国を河川によって県域を定めたことが、北山村と新宮市熊野川町の一部に飛地を残すことになったのです。和歌山県への統合が落ち着く間に、飛地という地域がある全国でもめずらしい県境が決まりました。



明治期の旧県庁

廃藩置県によって、徳川茂承をはじめ安藤直裕（田辺）、水野忠幹（新宮）らの知藩事は、東京へ移りました。その後は、明治政府の役人として、津田出の弟の津田正臣が県令に任命されて県政を担当し、浜口梧陵らがそれを助けました。1872年に水戸藩出身の北島秀朝、1874年に土佐藩出身の神山郡廉が県令に着任しますが、この2人の県令が勤めた約10年間に、初期の和歌山県の政治が確立され、和歌山県発展の基礎が築かれました。

睦奥宗光と条約改正

睦奥宗光は、1858（安政5）年に江戸へ遊学して、勝海舟に弟子入りしました。翌年神戸にあった幕府の海軍塾へ入り、土佐の坂本龍馬とも知りあいました。1867（慶応3）年睦奥は、紀州藩を脱藩して坂本がつくった海援隊に入り、広く世界への夢を抱くようになりました。

その後、新政府で働くことになり、外務局御用掛や兵庫県知事などをつとめました。和歌山藩の依頼で和歌山へもどり、一時藩政改革に参加しますが、廃藩置県のとき、新政府に呼び返されました。1878年、板垣退助らの自由民権運動にも関係したことが原因で、5年間山形および宮城の監獄所へ送られました。しかし、1882年特赦で許され、欧米諸国を視察した後、帰国し、新政府の外交に関係します。1888年、全権公使としてアメリカに赴任して、メキシコとの間でわが国最初の対等の修好条約を結びました。



睦奥宗光

1890年の第1回衆議院選挙に和歌山1区より当選し、1892年第2次伊藤内閣の外務大臣をつとめ、日本を苦しめている不平等条約改正の交渉を手がけます。1894年に領事裁判権の撤廃と関税自主権の一部回復を内容とした日英通商条約を結ぶことに成功しました。それがきっかけとなり、フランス、オランダなどヨーロッパの列国の圧力に押されて、徳川幕府が結んだ不平等条約を次々に改正させることになりました。日清戦争後の下関条約を結ぶときも重要な役割をはたしました。

第4章 近代和歌山の発展



地租改正と那賀郡の農民

時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
昭和(戦後)・平成時代	

地券の発行

明治政府は、富国強兵、殖産興業をかねて政治をすすめました。そのための財源を確保する必要がありました。封建時代は、領主が年貢を村ごとに割り当て、収穫量を基準に現物(米)を徴収しましたが、明治になって地租は地価を基準にして貨幣で納めるようになりました。そのため、地租改正という土地に関する大きな改革を行い、土地の所有者に地券を発行しました。地券には、豊作や凶作にかかわらず、一律に算定された地価の3% (後に2.5%) の税率をかけた地租を貨幣で納めるようにと記されています。地租は自分がその田畑を耕作しているかどうかに関係なく、地券をもっている人が納めなければなりません。政府はまた、1872 (明治5) 年に地券を発行して土地の所有者を決めましたが、このとき、市街地にあった武家屋敷や町家および入会地などの無税地も調査しています。そのため和歌山・田辺・新宮の城下町でも新しい税を納めています。農村部では1874年までは江戸時代と同じ方法で納めていました。



地券

和歌山県の地租改正

1873 (明治6) 年7月に地租改正条例が公布されたことにより、和歌山県でも翌年4月に地租改正の担当係を県庁におき、各郡にも地租改正係がおかれしました。1875年3月に地租改正を実施するための心得が公布されました。これにもとづいて全县で測量がはじめられました。測量は戸長・副戸長ら地方の有力者を任命して村ごとに実施しました。

測量が終わると、各村の総代が中心となって、土地の等級の原案を作り、県令 (県知事) へ提出しました。県は検査官を各地に派遣して調査を行いました。その結果、県下1,302か村のうち503か村が調査のやり直しを命じられました。国や県が当初、予想していた額よりも少なかったからです。再調査のうえ、土地の面積や収穫を増やして報告させられることになりました。

このような厳しい調査の結果、和歌山県では江戸時代末期に田・畑・宅地の面積が3万4,238町歩だったのが、4万9,466町歩と44.5%も増加しました。

粉河騒動おこる

和歌山県では米1石 (180 l) あたりの値段を5円50銭と告示しました。この米価をもって地価を決める基礎にされると、たいへん高い地価になり、また地租も高い金額になってしまいます。当時の那賀郡で

* 1 町村の行政をした役人。

は米の取引値段は4円60銭ぐらいでしたから、5円50銭はあまりにも高すぎました。

粉河の児玉仲児が和歌山県令神山郡廉に提出した意見書には、和歌山県を同一の米価で地価を決めないで、米価の高い地域と低い地域の差をつけてほしいと要求し、県になぜ同一の米価にしたのか理由の説明を求めています。しかし、県令は、回答をしないままで米価を決めてしまいました。

那賀郡の戸長・副戸長らが粉河に集まって協議し、米価の引下げを陳情しましたが、県は県下の10か所の米価を平均して5円27銭と少し下げて、那賀郡の農民の要求をかわそうとしました。戸長・副戸長ら16名は名を連ねて、これでは承服できないから、もう一度考え直してほしいと更正願を提出しました。

1876年5月、県庁から呼出しを受けて出頭した戸長・副戸長ら全員が、政府に反抗しているとの理由で捕えられてしまいました。心配して長田観音や粉河寺に集った農民たちは、捕えられた人の釈放を求めて和歌山へ向かいましたが、堺県の弓削警部らの説得や県の要請で大阪鎮台の兵隊が出動したという知らせを聞いて自重しました。

和歌山県では、粉河の農民の騒動のほかにも日高郡脇ノ谷村（印南町）や西牟婁郡鮎川村（田辺市）などでも不穏な状況がおこっており、県が示した地租改正を承知しない村が33か村もありました。

新しい政治を行おうとする明治政府は、いろいろな面で費用がかかりましたが、そのほとんどを農民が納める地租に頼らなければなりません。農民は重い負担にたえながらも、政治に対する関心をだいに高めていきました。



児玉仲児



わかやまの知識



【猛山学校】

自由民権運動が全国的に広まった1877（明治10）年9月ごろ、粉河寺境内にその山号の風猛山にちなんだ猛山学校が設立されました。開設を勧めた1人が、当時、明治政府の高官であった陸奥宗光です。これに応じた児玉仲児たちは、地租改正における弾圧で人々がなくしていた活気を回復するため、自由で自主的な気力をもつ若者の育成に期待したのです。翌年2月、自由民権の結社ともいべき実学社が創設されました。社名は、「学を空言にせず実行する」という意味です。今、文明の時代に出会わした者が、この機会を生かし応分の義務を尽くし各自の権利を守り、自らを成長させるための組織として実学社は出発しました。そして若者の教育も重要と考え、実学社が管理する猛山学校を設置したのです。猛山学校の経営は、生徒の授業料と有志の寄付により、入学資格を小学校卒業または学齢をこえた者とししました。歴史・法律・作文・算数を授業し、文学批評会と演説会を実施し、英語も教えイギリスのベンサムなどの自由主義も説かれました。生徒は、那賀郡を中心に120人をこえる時もあり、のちに桃谷順天館の創業者や代議士などが出ましたが、実学社が解社した翌年（1883）に廃校となりました。

ほかに実学社社員が係わった私学校に、丁ノ町村（かつらぎ町）の自助義塾、豊田村（紀の川市）の共学舎などがありました。



実学社猛山学校跡（粉河寺）

第4章 近代和歌山の発展



ノルマントン号事件とエルトゥールル号の遭難

時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
昭和(戦後)・平成時代	

本州 最南端の潮岬あたりは黒潮洗う景勝の地ですが、江戸時代以来、上方と江戸を結ぶ海上交通の難所で、海難事故も多く発生したところでした。幕末になると外国艦船の来航も増えました。そこで、1869(明治2)年に全国に10灯台が建設されることになりましたが、いちはやく大島の檜野灯台が日本一古い石造灯台として翌年6月に点灯し、潮岬灯台は1873年に点灯しました。ところが明治時代中ごろに、この熊野灘で大きな海難事故が相次ぎました。イギリス商船ノルマントン号とトルコ軍艦エルトゥールル号の遭難です。ともに近代国家への道を歩み始めたわが国の国際問題にかかわる事件でした。

ノルマントン号事件

1886年10月24日夜の大しけの中、横浜から神戸に向かっていたノルマントン号が、熊野灘で遭難し沈没しました。イギリス人の船長以下船員は4隻のボートに乗り移り、翌朝船長たち14人が分乗する2隻は串本に漂着しました。漂流中の2隻は荒波をおして須江浦(串本町)が出した141人の漁師が分乗する9隻の鯉船の献身的な活動により救助されました。3人が死亡していましたが、瀕死の2人も治療により回復し12人が助かり、計26人は26日午後急ぎ神戸に向いました。ところがその後、日本人船客全員が行方不明になっていることがわかってきました。1889年に東海道線が開通するまでは、貨物船に乗り京浜と阪神間を往来する客もいたのです。水死体があがらないことから、船倉に閉じこめられたとも推測されました。

これに対して、この事件を審判した神戸のイギリス領事館は11月初旬に船長ドレイク以下全員に無罪の判決を下したため、国民はくやしがり、船長たちが乗客を見棄てて避難することはおかしい、日本人を蔑視するものなど世論が大いに高まりました。ここにいたって、日本政府は兵庫県知事に船長以下を殺人罪で神戸のイギリス領事館に告訴させ、また沈没船を捜査し日本人の遺体を実地検分しようとしていました。はじめノルマントン号の沈没場所は潮岬海上の暗礁付近と推定されていましたが、漁業者の証言で潮岬より東の勝浦港外と推定され、11月22日から3日間捜索しました。水深があり水底までは潜ることができず十分に捜索できないまま、結局勝浦港沖約4キロメートルの地点を沈没場所と推定し、11月24日に勝浦の狼煙山に木標を建てました。国民の手前実施したもののイギリスに遠慮したかのような捜索活動といわざるを得ないものでした。

同年12月8日横浜のイギリス領事裁判所が下した判決は、船長は職務怠慢罪で禁獄3か月、他は無罪という軽いものでした。その理由は、当時わが国は、不平等条約をおしつけられていて裁判権がなく、イギリス領事による裁判であったからです。

このころ日本は、欧化政策をとり不平等条約の部分的回復交渉を進めていましたが、この事件を契機に領事裁判権の完全撤廃、条約改正をさげぶ国民の声はさらに高まり「ノルマントン号沈没の歌」が流行し、明治政府を大きく揺さぶる事件になりました。結局、領事裁判権については1894年に完全撤廃できました。

* 1 ヨーロッパ文化の移植を目的とした外交政策。

なお、救援活動などに不便を感じたことから、串本地方では英語習得がとなえられ、翌年2月、串本小学校に大人向けの英語の夜学がはじまり、小学校教科に英語科が加えられました。小学校での英語の授業は県下初であると見られています。

エルトゥールル号の遭難

トルコはアジアの西端、ヨーロッパに接する所であり、19世紀末にはヨーロッパ列強の圧迫に苦悩していました。それで、アジアの東端にあって欧米の侵略を辛うじて防ぎ近代化を進めていた日本に敬意の念を抱き、トルコ皇帝は日本に親善使節を派遣しました。

日本との親善の行事を終えて帰国の途について1890年9月16日夜、使節を乗せたトルコ軍艦（エルトゥールル号）が遭難しました。熊野灘で暴風に遭い、串本町大島の檜野灯台下の岩礁に乗り上げて艦体を打ち砕かれました。生存者はわずか69人（うち重軽傷63人）、540人が水死または行方不明という大事故となりました。17日未明に傷を負った外国人が灯台職員に救助を求めました。朝、大島村の人々は、漂着した負傷者を寺院と灯台官舎などに収容し、医者が治療・看護し、村を挙げて衣食を提供しました。また収容した遺体は共有墓地に埋葬しました。18日は海面に漂流する

遺体を引き揚げるため大島・古座・西向（いずれも串本町）などから船や人々が出ました。遺体が多いので、共有墓地では収容しきれないうえに遠いので、遭難現場の近くに埋葬地を設定し、その後の遺体はそこに埋葬しました。9月末まで続けられた捜索や漂着で約220人の遺体を収容しましたが、約320人は行方不明でした。



トルコ軍艦記念碑（串本町）



エルトゥールル号の遭難を記述したトルコの教科書

トルコは海軍選り抜きの軍人たちを失い大きな打撃を受けましたが、トルコ政府は大島村の人々の献身的な努力に感謝して、3,000円（現在の約3,000万円）を村に贈りました。1937（昭和12）年、遭難墓地の改修が行われた時に、この事故を悼んで埋葬地の近くに大理石の遭難碑が建てられました。

また、1974年、トルコ記念館が建設され、館内にはエルトゥールル号の模型や遺品などが展示されています。遭難碑では今も5年ごとに追悼式典が行われ、記念館とともに日本とトルコの友好の絆となっています。

第4章 近代和歌山の発展



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
昭和(戦後)・平成時代	

日清・日露戦争と県民

府県制・市町村制

1888（明治21）年4月、政府は市制・町村制を、次いで1890年5月には府県制・郡制を公布して、国一府県一市町村の系列に基づく地方自治のしくみを明らかにしました。このとき和歌山県は、1市（和歌山）、2町（田辺・新宮）、229村からなっていました。市・町・村が必要とする費用はすべて各市町村会の議決で決まり、徴税、徴兵、戸籍などの仕事は政府からまかされました。市・町・村は、このような国の指示や負担をやりとげる行政と財政の力を備えなければなりません。この制度の基本は、第二次世界大戦が終わり1947（昭和22）年の地方自治法が制定するまで変わりませんでした。

当時の和歌山県の財政をみると、予算の多いのは土木費です。1889年の大水害と、その後も頻発する災害によって負担は増えました。義務教育の普及により、教育費の負担もたいへんでした。小学校教育に関する費用のほとんどが市町村負担であったため、当時の行政担当者は財政のやりくりで苦労しました。また、各地域の利害が対立して、県会などでは、予算の配分で激しい議論がくり返され、県民も県政について関心をもつようになりました。議員の地位も地方の有力者にとって働きがいのあるものとなり、選挙も激しくなっていました。

日清・日露両戦争と民衆

日清戦争の戦費は約2億1,000万円で、当時の日本の1年間の予算の約2.7倍、日露戦争の戦費は19億8,400万円で、このころの年間予算の約3倍にもなりました。日本は、2つの戦争に多くの兵士を失い、ぼうだいな国費も費やしたのです。このとき政府は、2回にわたる増税をしました。これは当然市町村の財政を圧迫しました。戦争が終わっても政府は増税をそのままつづけました。

また政府は、アメリカ・イギリスなどの外債の利子が安かったので、外国から14億円にのぼる借金をして軍備を整えました。日本は、アメリカ・イギリスなどに信用される国家になり、外債の募集がしやすくなっていました。

1908年、日本は不景気に見舞われたため、農村は困窮しました。和歌山県会は翌年、地租を軽く



日清戦争と日露戦争の記念碑（海南市下津町福勝寺境内）
側面に戦死した加茂村出身兵士（日清戦争3人、日露戦争4人）の氏名が刻まれている。

するように政府に訴えています。地租を下げれば農民の生活にゆとりが出るだけでなく、商工業の発達も促すことになると、県会は和歌山県民の必死の叫び声を代弁していました。

日露戦争でなくなった兵士は和歌山県で991人、日清戦争の4倍以上の若者の命が失われました。しかし、戦争の影響が県民の日常生活のすみずみまで及んでいたことから、日露戦争の勝利に県民は喜びにわきました。一方、ポーツマス講和条約の内容が伝えられ、賠償金がとれないことがわかってくると、政府に対する県民の不満は爆発して、「講和反対」の声が盛り上がりました。和歌山市の新聞社が発起人となって市民大会を開きました。講和反対の熱気は郡部へも広がっていきました。

講和反対の声が広がっていくなか、かつて那賀郡の農民を率いて地租改正運動の反対に立った児玉仲児は、「講和条約の内容はおおむね妥当であり、かならずしも恥を受けることはない」といっています。

地場産業の興隆

繊維産業、鉄道業、銀行業などが設立がおこってくるのは、日清戦争以後のことです。会社の発達は近代的産業だけでなく、伝統的な産業でもみられました。

明治時代後期の和歌山県は、綿工業中心の工業県になっていきました。特

に日露戦争後はさらに会社をつくる雰囲気が高まりました。なかでも和歌山市域の和歌川流域に紡績工場、綿ネル関連工場がつくられ、その後、化学工業がおこりました。また湯浅に醸造業、新宮には木材工場が発展しました。『日本帝国統計年鑑』によると、市制になったころの和歌山市は、福岡・熊本・岡山より大都市で、その人口は全国12番目でした。従業員約800人の和歌山紡績株式会社、約580人の和歌山織布株式会社や和歌山綿ネル株式会社などの繊維産業や、和歌山電灯株式会社が営まれており、1909年には、従業員10人以上を雇っている工場は、県全体で133工場、労働者は8,018人いました。その他、銀行や日刊新聞社なども営業しており、和歌山市は「南海の工業地」とよばれるほどになっていました。



わが国最古のベンゼン精留装置



綿ネル製造販売の広告（「和歌山県下諸商独案内」和歌山県立図書館蔵）

こうした企業の勃興は、和歌山市の商業や工業の発展をもたらしましたが、和歌山市の都市的景観を変貌させていきました。それにともない、周辺部の農村は、しだいに都市への依存傾向が強くなって行きました。農産物も都市の消費を目的にして生産するようになり、人々も日常的に都市に出入りして、新しい知識や風俗・文化を農村へもたらしました。道路の整備や交通の発達は、それを早めて行きました。

* 1 アメリカのポーツマス軍港で開かれた、日露戦争の講和条約のこと。

第4章 近代和歌山の発展



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
昭和(戦後)・平成時代	

南方熊楠と紀南地方

熊楠と学問

和歌山を舞台に世界へ発信した南方熊楠は、1867年(慶応3)年和歌山市の橋丁に生まれました。子どものころから研究しようとする心が強く、動植物、歴史、文学などの本を次々と読み、大事なところは書き写していきました。「写して覚える」ということが、熊楠の生涯変わらない勉強方法だったのです。

旧制和歌山中学校を卒業して上京、大学予備門(東京大学)に入学しましたが、規則づくめの学校の授業をきらって退学、海外で新しい学問に触れたいとアメリカに渡り、6年後にはイギリスの首都ロンドンに移り、大英博物館図書室などで読書と筆写に明け暮れる毎日を送りました。こうして足かけ14年、海外で新しい知識をいっぱい吸収して帰国したのは、1900(明治33)年のことです。



南方熊楠

帰国後、熊楠は研究の場所を熊野に求めました。那智山をはじめ、熊野地方にはまだ豊かな原生林が残り、人々の暮らしも古い時代のしきたりを守っていると聞いたからです。熊楠は、そうした原生林の動植物、特にキノコ、粘菌などの標本づくりと、山村の暮らし、日常生活の仕方やしきたりなどの調査にあたりました。昼間は山には行って植物観察をし、夜はランプの明かりで外国の雑誌へ日本文化の紹介をする論文を書きました。3年後、今度は田辺へ研究の場所を移しました。田辺付近の神社の森には、原生林の残るところがありました。神社の森の古い木にはヤドリギやシダのなかま、キノコ、粘菌などいろんなものがありました。熊楠は毎日のように森に入って標本の種類を増やしていきました。



熊楠筆 キノコ彩色図

熊楠と環境保全

そんなやさき、大きな問題がもち上がりました。明治政府が進めた神社の合併です。1906年に出されたこの方針は、一つの町や村に一つの神社を残し、ほかはすべてこれに合祀・合併させようというもので、1906年に和歌山県下に5819社あった神社が、4

年後の1910年にはわずか609社になるというような合併が行われたのです。合併された神社の森は、それを売ってお金にかえたため、木がたくさん切られていきました。ふるさとの風景といえば、その一つに「鎮守の森」が思い浮かびます。熊楠は、神社がなくなることでその地方の歴史やしきたりなど失われるものが大きいとして、人々の合意を得ない、強引な神社の合併に勇気ある反対運動をおこしました。はじめは賛成者も少なく、いろいろ苦勞しましたが、とうとう国会で取り上げられ、1918（大正7）年、神社合祀は廃止されました。

この問題がおさまってから、熊楠は再び研究生活にもどりました。以前と変わらずに日本文化を海外に紹介し、粘菌やキノコの収集に励み、国産の発見種数を増やしていきました。しかし、そうした研究の成果を発表する機会も得ないまま、1941（昭和16）年、熊楠は田辺市で75歳の生涯を閉じました。一生野にいて、世界にも知られる大学者でした。

今、白浜町番所山には、南方熊楠記念館が建ち、その庭には、昭和天皇が熊楠の生涯をたたえてよまれた「雨にけふる神島を見て紀伊の国の生みし南方熊楠を思ふ」の歌碑が建っています。

また田辺市中屋敷町の旧邸は修復され、隣接地に「南方熊楠顕彰館」が建設され資料の閲覧等に応じています。



わかやまの知識



【神島】

田辺湾に浮かぶ神島は、わずか3haほどの小さな島ですが、生物の宝庫として注目を集めています。その理由は、昔から島の木も草も石もすべて島にまつられている神のものとしてだれも持ち去ろうとしなかったからです。1904（明治37）年に、はじめてこの島に上陸した南方熊楠は、熱帯、亜熱帯の植物が混生する姿に感動したといいます。ところが、1909年に島の神が近くの村の神と一緒にまつられたため、この島の木も下木が切られることになりました。

このことを聞いた南方熊楠は、島に生えている木は、魚が集まってくる大事な役目をもっており、また、神島のように人の手の入っていない島は、植物の生態を見るために大切な森だから、ぜひ残すようにと訴えました。熊楠の言い分を聞いて村長は下木を残すことに同意し、その後神島は魚付保安林の指定を受け、勝手に処分できないことになりました。

1929（昭和4）年、昭和天皇は田辺湾へ艦船をとめ、熊楠の案内で神島に上陸して生物の観察をされました。そのため、神島は全国的に有名な島となり、上陸する人も増えてきました。そこで、神島の自然を守るため熊楠はいろいろ働きかけ、とうとう1935年に神島は文部省から天然記念物としての指定を受けました。

神島には熊楠の和歌を刻んだ碑が建っています。それには、「一枝もこころして吹け沖つ風 わが天皇のめでましし森ぞ 熊楠」と刻まれています。海の風に、神島の森の木の枝を折ることのないよう注意して吹きなさい、とよびかけたものです。



神島（田辺市）

* 1 第2編 第5章「天神崎の自然と保全運動」208ページ参照。

第4章 近代和歌山の発展



夏目漱石と和歌浦

時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
昭和(戦後)・平成時代	

漱石と和歌山講演

明治時代の文豪、夏目漱石（1867～1916）は、1911（明治44）年8月、和歌浦に2日間滞在し、和歌山市で講演を行ないました。漱石は、『坊っちゃん』『吾輩は猫である』『こころ』などの作品で有名な小説家ですが、社会の在り方や人間の生き方を真摯に探究した思想家としても知られています。この漱石の思想が最もよく語られていると評されるのが、和歌山市で行なわれた「現代日本の開化」という講演です。

夏目漱石は東京大学で英文学を専攻しました（ちなみに同学年に南方熊楠がいましたが、2人の間には交流がありませんでした）。卒業後は東京・松山・熊本で英語の教師をし、1900年から2年間、英国留学をした後、東京大学の講師となります。その後、教職を辞め、東京朝日新聞社に入社し、小説家として多くの作品を新聞に発表しました。

1911年、当時の大阪朝日新聞社が、記者を動員して関西各地で講演会を催しました。漱石も誘われて参加し、明石・和歌山・堺の三か所で講演をしました。漱石は明石で講演した後、8月14日の昼過ぎ、当時の和歌浦にあった望海楼という旅館を訪れます。夕方、旅館の裏手にあったエレベーターに乗り、玉津島神社背後の奠供山から和歌浦を一望し、その後、紀三井寺に向かい、高い石段に息を切らしながら夕暮れの和歌浦湾を眺めました。翌日は完成したばかりの新和歌浦遊園地を見学し、東照宮に立ち寄った後、片男波の砂浜で波と遊び、昼過ぎには和歌山市の現在の和歌山中央郵便局付近にあった当時の県議会議事堂（根来寺一乗閣として現存している）で講演を行いました。漱石の和歌浦体験は、理性的に生きようとする人間の苦しみをテーマにした『行人』という小説で、詳細に描かれています。



和歌浦にあったエレベーター

漱石の近代化論

当時は日露戦争に勝利した後で、多くの人々はこれで西洋と同じ「一等国」になったと思い、今後はもっと文明開化（西洋化、近代化）が進み、強い豊かな国になるだろうと考えていました。漱石が講演した前日、同じ会場で著名な教育者による講演会があり、そのような内容が話されていました。しかし漱石は、こうした一般的な考え方に批判的な話をしたのです。日本は明治維新以来、西洋風に文明化し、“開化”することに努めてきたが、それは外部から無理やり強いられたもので、自ら発展の順序をたどった文明化ではない。“外発的”開化であり、やむをえず西洋の“真似”をしたもので、“皮相上滑り”の開化である。したがってこれからは、多くの問題を抱えて苦しむことになる、実に困ったことだ……と話したのです。

会場には約1,200人も聴衆が詰めかけていましたが、漱石の真意を聴衆が十分理解したとは言えない講演でした。しかしその後の日本の社会は、漱石が語った通り、近代化に伴う多くの矛盾に直面することになりました。このことから今では、百年前の和歌山講演は、的を射たすぐれた文明批評であると高く評価されています。

講演終了後は近くの「風月庵」で慰労会が催されますが、台風接近による暴風雨が激しくなり、和歌山市内の旅館（本町3丁目付近にあった富士屋旅館）に泊り、不安な一夜を明かします。この体験も『行人』に興味深く記されています。

ところで漱石は関西での講演を依頼されたとき、ぜひ和歌山を講演先に入れてほしいと返事しました。なぜ和歌山を希望したのか、理由は不明ですが講演会は漱石の希望に沿うように計画され、当初和歌山は最終の講演地に予定されていました。漱石自身もこの和歌山で、自らの思索の結論を思い切って語ろうとしたのでしょう。

和歌山は漱石にとってたいへん重要な場所となったのです。



旧和歌山県議会議事堂（現根来寺一乗閣）

第4章 近代和歌山の発展



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
昭和(戦後)・平成時代	



『牟婁新報』と大逆事件

水準の高い和歌山県の新聞界

新聞は、世論をつくるとともに文化の巨大な担い手であるといえましょう。私たちは、新聞によって世の中のできごとを知り、政治問題や社会問題についての知識を高めていきます。まして今日のようにテレビやラジオなどがなかった時代には、新聞の果たす役割はたいへん大きいものがありました。

県都和歌山市で、新聞が発刊されるのは1872(明治5)年ごろからです。文明開化を進める政府や県の主張を支持し、それを応援する立場から『和歌山新聞』が発刊されました。その後自由民権運動を進める立場の新聞などのほか、多くの新聞が発刊され、いろんな立場の読者・県民の支持を得ながら発行部数を増やしていきま

明治時代和歌山県で発行されたおもな新聞

新聞名	創刊年	発行地	発行度数
官許和歌山新聞	明治5(1872)年	和歌山市	隔日刊
弱山絵入新聞	明治15(1882)年	和歌山市	不明
和歌山新報	明治25(1892)年	和歌山市	日刊
紀伊毎日新聞	明治26(1893)年	和歌山市	日刊
熊野新報	明治29(1896)年	新宮町	隔日刊
和歌山実業新聞	明治30(1897)年	和歌山市	日刊
牟婁新報	明治33(1900)年	田辺町	隔日刊
熊野実業新聞	明治33(1900)年	新宮町	隔日刊
有田新聞	明治34(1901)年	湯浅町	月3回刊
紀南新聞	明治35(1902)年	御坊町	隔日刊
紀伊新報	明治42(1909)年	田辺町	日刊
熊野日報	明治44(1911)年	新宮町	日刊

明治三十一年十一月廿七日 報新婁牟 (回十月) (可許物便郵種三第)



『牟婁新報』記事(大石祿亭とは大石誠之助のこと)

したなかからすぐれた新聞記者も育っていきました。また、他府県から和歌山へ来て新聞の編集に携わる人もいました。和歌山は、そうした人材を受け入れ、活動の場を保障する風土と土地柄でした。当然和歌山の文化水準は上がっていきました。河島敬蔵が日本で最初のシェイクスピア劇の翻訳「ロミオとジュリエット」を和歌山耕文舎から刊行しました。

*1 和歌山市出身の英文学者・翻訳家。1986(明治19)年、『露妙樹戯曲』として刊行された。

社会主義思想と「牟婁新報」

日露戦争に反対する声は、和歌山市でもキリスト教青年グループを中心に行われています。日露戦争の勝利は、わが国の国民に大きな自信を与えましたが、多大の負担を強いることにもなりました。そういった世相を反映して、社会主義の思想もおこってきました。

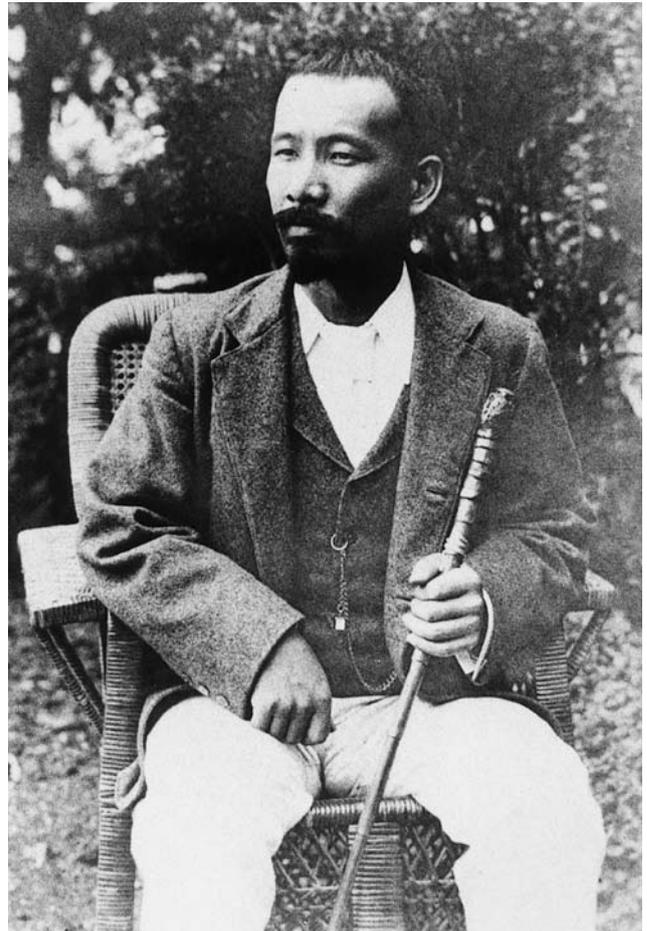
毛利柴庵が1900年に紀南の中心地田辺で発行した『牟婁新報』は、社会主義の考えをもった記事も書かれている新聞として、広く世に認められていきました。柴庵は、新しい仏教の考えを取り入れた社会主義の傾向のもち主でしたが、考え方の広い人でしたから、1905年に社会主義者の荒畑寒村が記者として田辺に招かれ、ついで管野スガ（後に幸徳秋水の妻）も田辺に赴任すると、同紙はさらに激しい社会主義的主張をくり広げました。また、東京などの社会主義者たちとも交流が深かった、新宮の医師大石誠之助も、この『牟婁新報』の有力な投稿者の1人でした。

大逆事件と大石誠之助らの悲劇

社会主義思想が田辺で最も盛んであったのが、荒畑寒村らが活躍した1905～06年で、新宮で最も盛んになったのは1908年のことです。幸徳秋水がこの年の夏、新宮に大石をたずねています。大石は困っている人からは治療費をもらわないなど、「ドクトル（毒取る）さん」と親しまれていました。若者にも共感をよせていた大石の人柄をしたって、社会主義に関心をもつ青年たちが、大石のまわりに集まり、さかんに論議しあいました。

1910年、長野県で爆弾を持っている者が見つかり、天皇の暗殺を企てたとして、全国で社会主義者の逮捕がつづきました。その中心者は、幸徳秋水ということにされました。世に大逆事件とよばれた事件ですが、このとき、大石を中心とする「紀州グループ」の人々6名も次々ととらえられていきました。そして、大石と成石平四郎の2人が死刑、成石勘三郎・高木顕明らが無期懲役に処せられました。高木顕明は、新宮の浄泉寺の住職で、貧困などで苦しんでいる人々の相談相手としてやさしく手をさしのべていました。そうしたことから、たくさんの人々からしたわられていました。また、成石勘三郎と平四郎の兄弟は請川（田辺市）で将来を期待されていた青年たちでした。

この事件をきっかけに、日本では、特に社会主義者のとりしまりがたいへん厳しくなりました。第二次世界大戦後、大逆事件にかかわる資料が次々と発見されてこの事件の真相が明らかにされ、大石らは、全くの無実であったことがわかりました。



大石誠之助

第4章 近代和歌山の発展



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
昭和(戦後)・平成時代	

カナダ移民と工野儀兵衛

和歌山県は、^{ひろしま}広島県などとともに^{いみん}移民の多い県として知られています。移民先は、おもにアメリカ・カナダ・ブラジル・オーストラリアの木曜島などです。なかでもカナダへの移民は日高地方からの出身者が一番多く、^{みお}たくさんの人が移民した^{たいしやう}三尾村(美浜町)は、大正時代ごろから「アメリカ村」ともよばれています。^{くのぎへい}工野儀兵衛は、その移民の^{せんかくしや}先覚者です。



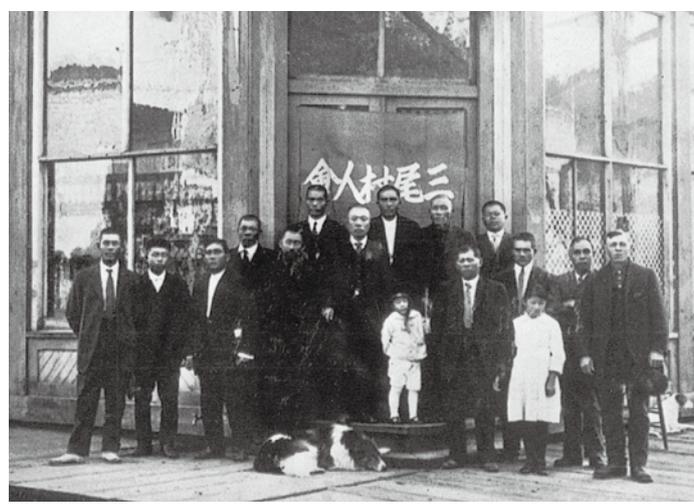
工野儀兵衛

カナダへ渡った工野儀兵衛

儀兵衛は、1854(安政元)年、^{だいく}大工であった^{しちべえ}工野七兵衛の長男として生まれ、家業を^つ継ぎました。19歳のときには^{でし}弟子をもち、工事を手がけるほどの^{しよくにん}職人になりました。かねがね村人の生活を守るために^{ていぼう}海岸に堤防を築く資金を得たいと考えていた彼は、活動の場を海外に求め、1人で家を飛び出しました。大工として働きながら、神戸へ移り、そして横浜に着いたのは1886(明治19)年でした。しばらくカナダへ渡るための情報を集めたのち、1888年9月にカナダのビクトリアに着きました。そしてスティブストンで漁業や農業をはじめました。儀兵衛は、近くの^{おどろ}フレーザー河にひしめく^{さけ}鮭の大群をみて驚きました。さっそく故郷の三尾の人々に「みんな来いよ、このリバー(川)では、サーモン(さけ)の上にサーモンが重なって泳いどる……」と手紙を書きました。

1889年、^{まね}儀兵衛の招きで弟の^{ちよきち}千代吉・^{いたろう}伊太郎および^{よしだかめ}吉田亀^{きち}吉ら数名がカナダに渡りました。それから毎年十数人以上の人が集団でカナダへ渡りました。1900年には「^{かなだみおそんじんかい}加奈陀三尾村人会」ができました。そのときの会員は150人でした。

事業で成功した儀兵衛は、貧しい人などを大事にする心が強く、ようやくカナダに渡ってきた^{めんどろ}村民の面倒をよくみたといわれます。そして、1911年に三尾村へ帰り、1917(大正6)年、63歳でなくなりました。



加奈陀三尾村人会

カナダへの移民の数

年	計	男	女
1900	150		
1909	400	330	70
1914	507	357	150
1919	614	435	179
1924	620	428	192
1929	639	413	226
1934	720	471	249
1936	763	510	253

「加奈陀三尾村人会報」より

第二次世界大戦前の移民

カナダへの移民はしだいに増え、1940（昭和15）年には、カナダの三尾出身者は2千数百人にも達しました。第二次世界大戦前の漁業移民は、出かせぎで金をたくわえて、故郷へ送りました。そして家屋の新築などにもあてられたため、大正末から昭和のはじめにかけて、村の家屋はみちがえるようになりかわりました。

1931年、加奈陀三尾村人会は、儀兵衛の恩義に深く感謝し、その活躍をたたえるための頌徳碑を三尾湾に臨む県道のそばに建てました。

第二次世界大戦後の移民

1950年には、カナダへの渡航も再開され、第二次世界大戦中に帰国した約400人のうち大半の人々は再びカナダへ渡りました。「三尾加奈陀連絡協会」が設立され、カナダ東部のトロントなどへも移住しました。

カナダの美浜町出身の日系人は、ブリティッシュコロンビア州に約2,300人、東部に約2,700人の計約5,000人といわれています。

今の日系カナダ人は、実業界・公務員・医師・教員・弁護士などいろいろな分野で多くの人々が活躍しています。

移民をした理由

三尾村は、もともと耕地が少なく、風波の強い岩石海岸で漁業の発展もあまり望めない土地でした。また村民の海をおそれない心意気や、海産物を上方（京・大阪）に販売して生活を支えた敏感さと、開けた心が村を移民村にかえていったと考えられます。

こうした人々は、政府の援助を受けないで、自分の意志で自由の天地に出かけて行った移民らしい移民でした。そしてカナダ西海岸の鮭漁業の発展に大きく寄与したのです。

今、カナダ在住の日系人は、「出稼ぎ移民」（二重国籍）から「永久移住」（日系カナダ人）へとかわり、三尾は、「日系人のルーツ」として、日系カナダ人の訪問地となっています。



アメリカ村（美浜町三尾）

第4章 近代和歌山の発展



紀伊半島の交通

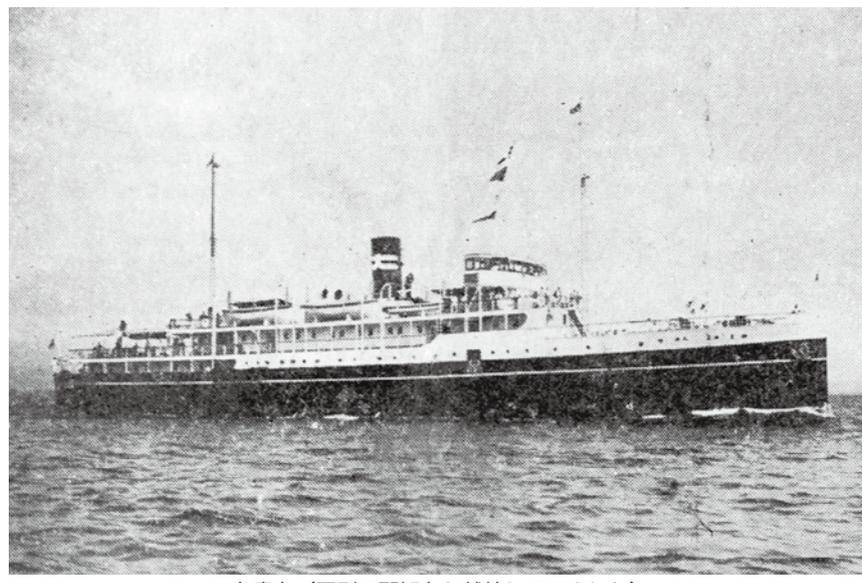
時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
	昭和(戦後)・平成時代

紀州航路

紀伊半島の交通は、新しい明治時代の世となっても、陸上交通が不便であったため、長く沿岸航路にたよらなければなりません。

紀州航路は、明治維新後の1869（明治2）年に開かれますが、さかんになるのは明治の中ごろになってからです。大阪と和歌山の港を結んでいた大阪商船は、南海鉄道が和歌山市まで開通したのにもない、1899年に和歌山市以南の航路へ進出するようになり、紀州航路は大きく変わりました。それまでは、大阪から紀伊半島をまわる大阪・熱田線などがおもな航路でしたが、日本共立汽船会社などを合併して、大阪商船が紀州航路を一人占めするようになりました。1911年には大阪・三輪崎急航路が開かれました。前年、暴風雨のため周参見沖で和歌山丸（400トン）が沈没、60余名の犠牲者を出す大事故も起こりました。

大正時代には、新宮鉄道が開通して、三輪崎港が勝浦港にその座を奪われます。昭和初期に入るとディーゼル客船牟婁丸・那智丸（1,600トン）を運行して、観光客を紀南地方へよびよせようとしていました。しかし、その後、紀勢鉄道（JR紀勢線）の建設によって紀州航路が打撃を受け、1938（昭和13）年大阪商船の紀州航路は廃止されました。



牟婁丸（同型の那智丸も就航していました）

また、紀伊半島はいくつかの河川が山間部と海岸部とを結んでいて、川船が交通の手段として大きな役割を果たしました。しかし、大正時代以降急速におとろえてい

きます。そんな中で、独自のプロペラ船を開発して、新宮～本宮間（後に新宮～十津川間）を運行し、やがて瀨峡観光をねらった熊野川の交通が注目されます。

鉄道建設、実現への努力

鉄道を通じたことが、明治時代の交通で最も大きく変わったことですが、明治期に営業をはじめたのは、私鉄の紀和鉄道・南海鉄道・加太軽便鉄道の3線だけです。1909年には、和歌山市内に市街電車が走りはじめました。

* 1 のち国有化され国鉄和歌山線となった。現在のJR和歌山線。

紀伊半島をめぐる紀勢鉄道をつくろうという運動は、1907年ごろ、当時三重県会副議長で鶴殿村村長（三重県紀宝町）であった竹原撰一が、和歌山県選出の衆議院議員山口熊野らに働きかけ、国会で議題にされるよう要請したことにはじまります。そして、たびたび議案が提出されますが、貴族院で否決されてうまくいきませんでした。



新宮鉄道（王子ヶ浜からみた御手洗にかけての風景）

1915（大正4）年、再び建設促進の県民大会が新宮で開かれるなど、各地で運動が盛り上がり、あらためて国会で取り上げられました。そして、第41回帝国議会において10か年で紀勢鉄道を完成すると決議しました。

その後、紀勢線の和歌山（現紀和）駅～箕島駅間が開通したのは1924年でした。しかし、鉄道建設が進められるにつれて、路線や駅の位置などをめぐって、意見が対立して、御坊駅設置の問題など混乱したところもありました。

なかなか進まない工事にいらだった東牟婁地方の住民たちは、新宮を中心にして鉄道をつけようとする運動をおこしました。まず、串本から三重県木本までの工事がはじめられ、新宮鉄道が国に買収されてきました。その間、下里では、玉の浦海岸の景色を守ろうと反対運動が occurred。新宮～木本間と江住～串本間が開通し、和歌山駅から三重県木本駅（現熊野市駅）に至る紀勢西線が開通したのは、1940年のこと、着工から実に20年6か月の年月がかかりました。

さらに、三重県木本～尾鷲間が通じて紀勢線全線（天王寺～亀山間）が結ばれたのは、第二次世界大戦後の1959年のことで、実に40年もかかったこととなります。

奈良県の五條と新宮を結ぶ五新鉄道が、長い間の陳情のすえ、1935年から着工されましたが、戦争で工事が中断され、現在一部JRバスが運行しているほかは、工事はとりやめになっています。

乗合自動車と観光

和歌山県では、最初に自動車が運転されたのは1913年のことで、大正末期には乗合自動車（バス）の実用時代に入りました。和歌山市では3社ほどが競争し、自動車路線は1925年には、会社・個人を含め52社を数えたといわれます。白浜温泉自動車は1925年に箕島～田辺間に長距離バスを走らせました。やがて、白浜温泉などを中心に温泉地と結びついて、乗客を運ぶように経営されていきました。



乗合自動車（海南市）

* 1 1913（大正2）年に新宮～勝浦間に開通された鉄道。

第4章 近代和歌山の発展



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
	昭和(戦後)・平成時代



教育の発展

義務教育のはじまり

1872（明治5）年8月、「必ず 邑に不学の戸なく、家に不学の人なからしめん事を期す」という理想をかかげて「学制」が発布され、日本の近代教育がはじめられました。小学・中学・大学についての規定が設けられていた「学制」の中心となったのは、6～13歳までを対象とした小学校教育の実施です。和歌山県でも翌年の始成小学(和歌山市立本町小学校)をはじめとして、1874年までに322の公立小学校が設けられました。

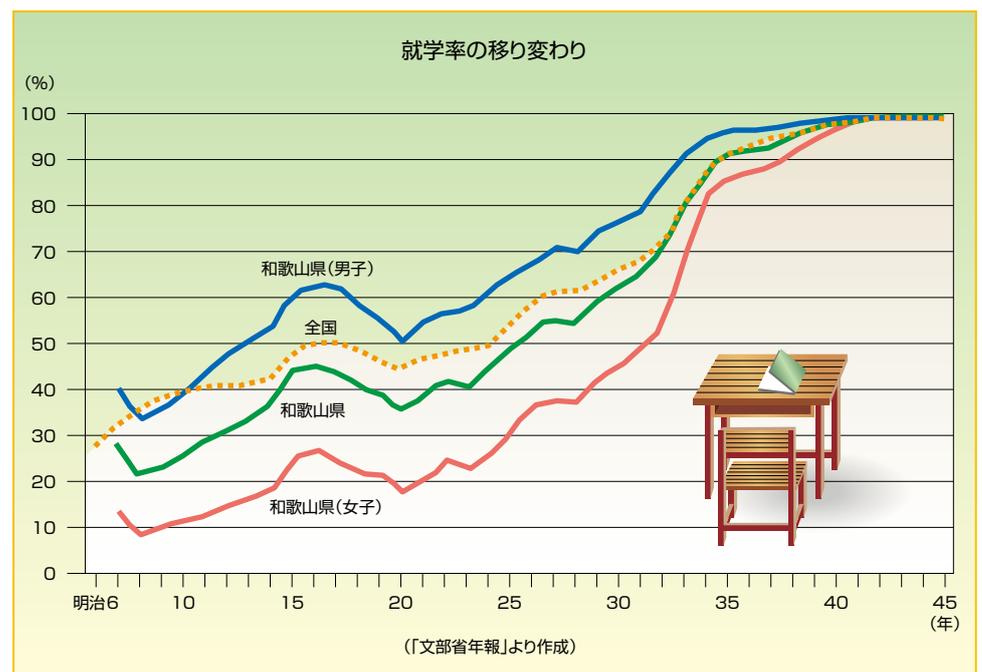


和歌山高等小学校 女子部

しかし、多くは寺院などを借用して開設したもので、その費用は村民の負担と授業料などによってまかなわれたため、学校の運営は容易ではありませんでした。授業料は月に50銭（米価を1石＝4円9銭として約1斗2升〔21.6ℓ〕分）となっていました。そうした高額な徴収はむずかしく、県内のほとんどの小学校では月に米1升（1.8ℓ）を集めていただけでした。それでも、子どもは家庭にとって重要な労働力

であったため学校へ行く児童が少なく、1877年、和歌山県の就学率は26.0%で、全国平均の39.9%よりかなり低く、以後も全国平均を下回る状態がつづきました。

1879年には「学制」が廃止されて「教育令」が出されました。さらに1886年には「小学校令」などの法律が出されて、教育の制度や内容が整っていきました。市町村制



が実施されて2年後の1890年には、市町村に小学校の設置が義務づけられ、「教育ニ関スル勅語」が出されました。1900年、授業料が廃止され、義務教育を受ける児童数は著しく増加します。また、県では貧しい家庭の児童の就学を助ける費用を設けたり、就学率の高い学校に就学旗を与えるなどの試みを行ったため、1902年以後、就学率は90%を超えるようになりました。



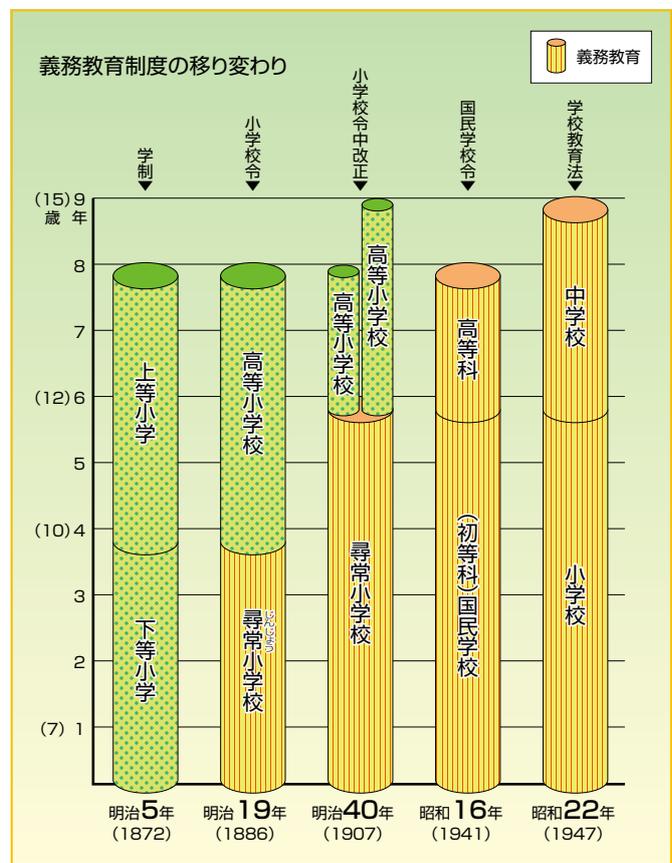
高等小学校用の歴史の教科書（明治29年）
（和歌山県立博物館所蔵）

大正期の教育の発展

義務教育を受ける児童が多くなると、卒業後に進む中学校などの充実が求められるようになりました。1911年当時、県内には21の中等学校などがあり、その内訳は小学校教員の養成を行う師範学校が1校、中学校が7校、高等女学校が4校、農業・工業・商業などに関する教育を行う実業学校が8校でした。またこのほかに、小学校を卒業して働いている青少年のための実業補習学校もできました。

第一次世界大戦後、国民生活が向上するようになると、教育に対する関心が高まって、中等学校へ進学する者が増加しました。1912（大正元）年の県内中学校への志願者数は1,240人でしたが、1922年には3,648人に増加しました。県では、1915年に海草中学校、1922年に伊都・海南・日高の3中学校を新しく設けるなどしました。女子については、1919年に有田郡立有田高等女学校が設立されたほか、家政に関する科目を中心とした実科高等女学校が多く設置されました。その後、女子に一般的な教養を求める傾向が強まって実科高等女学校は高等女学校に変わり、大正末年には高等女学校が9校、実科高等女学校が2校となっていました。なお、大正末年に実業学校は17校、実業補習学校は319校でした。

1923年、海草郡雑賀村（和歌山市）に官立和歌山高等商業学校（和歌山大学経済学部）が開校しました。これは、原敬内閣が計画した17の実業専門学校のうち1校で、紀伊徳川家からの30万円をはじめ合計47.5万円の寄附金が寄せられ、こうした大きな支援を受けてできたものです。また、この年文部省は全国の府県に盲学校・ろうあ学校の設置を義務づけましたが、県内ではすでに1909年に師範学校附属小学校にろうあ学級が設置されており、その後1915年に紀伊教育会が経営を引き継いで附属盲啞学校となり、1918年には県に移管されて県立盲啞学校となっていました。



第4章 近代和歌山の発展



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
昭和(戦後)・平成時代	

小川琢治と和歌山

生い立ちと経歴

田辺市出身の小川琢治(1870~1941)は、京都帝国大学教授として、日本の地理学や地質学の発展に大きく貢献した偉大な学者です。日本で最初にノーベル賞を受賞した、物理学の湯川秀樹(1907~1981)の実父でもあります。

琢治は、田辺藩の藩学校で漢学を教えていた浅井篤(1826~1896)の次男として生まれました。和歌山中学校で学んだ後、上京して1887(明治20)年に第一高等中学校に入りました。博物学者の南方熊楠(1867~1941)は、和歌山中学校の四年先輩にあたります。浅井家の家計が苦しかったため、琢治は1891年に元紀州藩士の小川駒橘(1844~1922)の養子になって勉学を続けました。養父の駒橘も、長屋家から養子入りして小川家を継いだ人物で、初代の和歌山市長となった長屋喜弥太(1838~1897)は実兄にあたります。小川家の先祖代々の墓地は、和歌山市堀止西二丁目の万性寺にあります。



小川琢治

琢治は、大学に入る前は哲学や文学を勉強し、『金色夜叉』で有名な尾崎紅葉(1868~1903)とも知り合いました。やがて琢治は、自然科学に関心を持つようになります。小川家の養子となった頃に、琢治は勉強の疲れから不眠症になり、治療のため故郷紀州の熊野地方を旅行することになりました。ところが出発のまぎわに大地震が起こり、途中の愛知県や岐阜県が大被害を受けました。琢治は自然の脅威や震災の悲惨さに心を痛めながら紀州に戻り、熊野では逆に大自然の雄大さや人々の独特な暮らし方に心を打たれました。この旅行経験が小川琢治を、地球の様々な現象を研究する地理学や地質学へと導いたのでした。

琢治は1893年に帝国大学(東京大学)理科大学地質学科に入学し、教授の小藤文次郎(1856~1935)や横山又次郎(1860~1942)らの教えを受けました。1896年に大学を卒業し、大学院を経て翌年には農商務省の地質調査所に入所します。そこで、日本や中国の地質調査にでかけ、また『地学雑誌』の編集を通じて地理学の発展に大きく貢献しました。1900年から翌年にかけてヨーロッパに出張し、フランスやオーストリアの学者と交流をもちました。1908年には、京都帝国大学文科大学に教授として招かれ、日本で最初に創設された地理学の講座を担当しました。翌年に理学博士となり、1921(大正10)年には京都帝国大学理学部に新設された地質学の講座に移ります。琢治は地球学団を組織し、雑誌『地球』を創刊して地理学や地質学を含めた広い意味での地球科学の発展に力を尽くしました。理学部長を務めていた

*1 第2編 第4章「南方熊楠と紀南地方」168ページ参照。

1926年には帝国学士院の会員になりました。同じ年に3男の秀樹が理学部物理学科に入学しています。琢治は1930（昭和5）年に大学を退官した後も精力的に研究を続けましたが、秀樹がノーベル賞を受賞する8年前の1941年に、急な心臓発作のため亡くなりました。

小川琢治の学問的業績

小川琢治は南方熊楠と並んで、自然科学と人文科学の両方に通じた「学問の巨人」でした。琢治は地質学者として、日本列島の地質構造の研究に成果をあげ、中国の撫順炭鉱などの天然資源開発にも大きな役割を果たしました。また、1923年の関東大地震が地殻の深部で生じたとする学説を提唱し、地震学の発展にも貢献しました。地理学者としては、人文地理学と自然地理学にまたがる幅広い分野で先駆的な業績を残し、また大分県の臼杵石仏の学術的価値を最初に発見するなど、大きな足跡を残しています。主な著書として、『地質現象の新解釈』、『台湾諸島誌』、『支那歴史地理研究』、『人文地理学研究』、『戦争地理学研究』、『日本群島』、『数理地理学』などがあります。

琢治の妻と子どもたち

小川琢治は1894年に、養父駒橋の長女 小雪（1875～1943）と結婚しました。当時、琢治はまだ大学生であり、5つ年下の小雪とは今でいう「学生結婚」でした。小川夫妻は、5男2女の子に恵まれました。妻の小雪は多忙な夫の学者生活を支え、7人の子どもたちを立派に育て上げました。湯川家に養子入りした3男の秀樹は、「二人の父」というエッセイのなかで、「母は七人の子どもの一人一人に、本当に公平に、そして惜しみなく愛情を注いだ」と記しています。石原家に養子入りした5男の滋樹（1913～1945）は第二次世界大戦で亡くなりましたが、残る4人の息子たちはいずれも一流の学者になりました。長男の芳樹（1902～1959）は金属工学を専攻し、東京大学教授になりました。貝塚家に養子入りした次男の茂樹（1904～1987）は中国古代史を、4男の環樹（1910～1993）は中国文学を専攻し、父の琢

治や秀樹と同じく京都大学教授になっています。

湯川秀樹は、先に触れた「二人の父」のなかで、紀州への想いを印象深く綴っています。

「養家も実家もともに、故郷が紀州にあるのは不思議な因縁である。暖かな日の光を浴びた南の国の山々では、蜜柑がおいおい色づいてきたことであろう。ちょうど父母の暖かな恵みを受けて子供が育っていくように」

湯川秀樹の養父となった湯川玄洋（1866～1935）は、小川琢治と同じ紀州出身の医者でした。玄洋は大阪で湯川胃腸病院を開業し、胃潰瘍で入院した文豪夏目漱石（1867～1916）を治療したことで知られています。小川琢治・湯川秀樹父子の偉大な学問的業績は、ともに紀州への深い愛情を基盤として育まれたものだったのです。



湯川秀樹

提供：京都大学基礎物理学研究所
湯川記念館史料室

第4章 近代和歌山の発展



しのび寄る戦争の足音

時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
明治・大正・昭和(戦前)時代	
昭和(戦後)・平成時代	

青い目の使節人形と答礼人形

昭和のはじめごろ、アメリカ ^{がっしゅうこく} 合衆国本土で、日本人の移民を排斥する運動がおり、日米両国の間でたいへん大きな問題になりました。このとき、両国の子どもたちに、友情の人形交換 ^{こうかん} をさせようという運動が起こりました。

1927(昭和2)年2月、約12,000体の青い目の人形が、アメリカから贈られてきました。当時の新聞は「人形使節 ^{しせつ}」と伝えています。この青い目の使節人形は、和歌山県に177体が贈られたといわれます。

西牟婁郡上富田町立朝来小学校の学校沿革史に、「平和の使者人形バージニア嬢 ^{しゅう} の歓迎会を開いた」と記されています。また同町立岩田小学校でも、5月7日に「日米親善の使者人形リアン嬢 ^{しゅう} の歓迎会を行った」と記されています。

このように青い目の人形を贈られた県内の各学校では歓迎会を開いて温かく迎えました。そのうちの東牟婁郡那智勝浦町立宇久井小学校に贈られたエミー嬢は、今も大切に学校で保管されています。

青い目の使節人形に対して、日本からも人形を贈って答礼することになりました。その費用は日本全国の小学生たちの募金 ^{ぼきん} によりました。東京や京都の選ばれた人形師によって高さ約90cmほどもある58体の人形がつくられ、それぞれに美しい和服が着せられました。これらの人形は、答礼人形として、各道府県名や都市名をつけられて、アメリカ各州に贈られました。ミス和歌山と名づけられた人形も贈られました。



青い目の人形・エミー嬢(宇久井小学校蔵)

野村吉三郎とウェヴスター辞典

和歌山中学校を卒業した野村吉三郎 ^{のむらきちさぶろう} は、1896(明治29)年、海軍兵学校を卒業して、アメリカ大使館など欧米諸国に駐在 ^{ちゅうざい} して、国際派の軍人となりました。1932年に第3艦隊司令長官 ^{かんたいし れいちょうかん} に就任し、翌年海軍大将 ^{しょうしん} に昇進しています。1937年4月、39年勤めた海軍を引退 ^{いんたい} して予備役 ^{よびえき} となり、学習院の院長に就任しました。これは、皇太子(現天皇)の初等科入学の準備にあたるためであったといわれています。野村の教育方針は、「人間をつくる教育」に徹 ^{てつ} し、院長としての学校運営も成果をあげていました。教職員や学生生徒にも信頼 ^{けいぼ} と敬慕 ^{けいぼ} の念をあつめていましたが、1939年9月、阿部信行内閣の外務大臣を命じられ、翌年

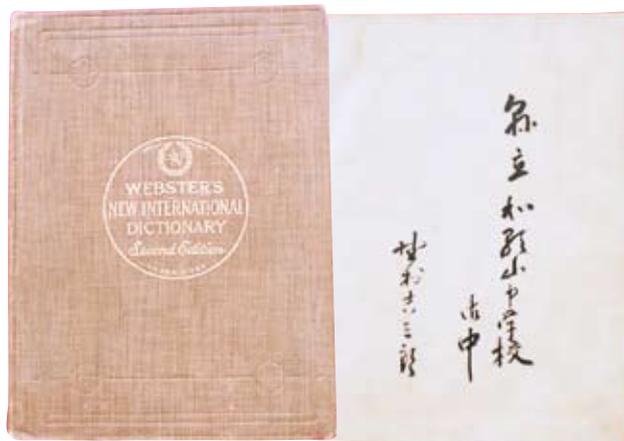
11月には、特命全権大使に就任して、アメリカに駐在しました。それは、悪化しつつあった日米関係の調整にあたるためでした。

1941年4月から、野村駐米大使とハル国務長官の正式会談がはじまりましたが、日本政府の中にアメリカとの交渉に積極的に賛成せず、対アメリカ・イギリスとの戦争を覚悟のうえで東南アジアへの進出を考える勢力がいて、野村の交渉は難航しました。1941年9月の御前会議で、10月上旬までアメリカとの交渉がまとまらないときは、アメリカ・イギリスとの開戦をすると決定しました。交渉は中国からの日本軍の撤退と日本・ドイツ・イタリアの3国同盟の解消を求めるハル長官と、それに反対する日本の間で妥協を見い出せなくなりました。野村はその間、アメリカとの戦争回避に死力を尽くしていました。しかし、12月8日、日本はハワイ真珠湾の奇襲攻撃をしたため、太平洋戦争に突入しました。

野村ら大使館員や、民間商社の社員とその家族は6か月に及ぶ抑留生活を送ったのち、日本へ送還されました。

野村は帰国のとき、5冊のウェブスターの辞典をみやげに買ってきました。母校の和歌山中学校、海軍経理学校と学習院などで、日本の将来を担う若者の勉強に役立てたかったからです。

帰国後間もなくの9月、野村は辞書をみやげに和歌山中学校を訪問し、全校生徒に英語の勉強に励むように講演しています。敵国語として排斥された風潮の中で、英語教育の大切なことを話す野村の話は、国際人として生きてきた人らしい贈りものでした。



ウェブスター辞典の表紙と表紙裏に書かれた野村吉三郎の自筆
(桐蔭高校蔵)



わかやまの知識



【陸軍歩兵第61連隊】

日露戦争により、わが国はさらに軍備を強化しました。1905（明治38）年7月に歩兵第61連隊が新しく編制されると、和歌山市や和歌山商工会議所は、和歌山市へ誘致しようとしてきました。日露戦争の不況を回復できると考えたからです。市債を発行してその資金で買い入れた今福の土地を提供しました。

1909年から連隊の駐屯がはじまりました。「ロクイチ」とよばれた兵士は和歌山県出身者が中心であったことから、郷土部隊として県民にも親しまれました。日中戦争直前の1937（昭和12）年4月、61連隊は「満州」（中国の東北）に渡りましたが、日中戦争がはじまると、61連隊も各地に転戦して抗日戦争を続ける中国軍や人民と戦わなければなりませんでした。

やがて、太平洋戦争がはじまると、フィリピンへ配置がえされ、1943年にはスマトラ島、さらにビルマ（ミャンマー）の戦線へ連隊の主力軍が移りました。そして、もっとも悲惨な戦闘といわれたインパール作戦に参加し、後退する日本軍の最後尾を受けもちました。米英軍のはげしい追撃にさらされて、連隊の約半分にあたる780余人の兵士を失う大悲劇となりました。

生き残った兵士たちは、1946年6月、多くの仲間を失いつつも、なつかしい和歌山へ帰ってきました。

第4章 近代和歌山の発展



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
	明治・大正・昭和(戦前)時代
昭和(戦後)・平成時代	



戦時下の和歌山

市民生活

1931（昭和6）年の満州事変いらい、わが国は中国大陸への進出に力をそそぎました。やがて、日中戦争、太平洋戦争へと戦争への道に突入していきます。戦争が激しくなるとともに、食料は乏しくなり、日用品も不足して、切符制、配給制にかわり、国民の生活が苦しくなりました。石油はなくなり、貴金属や鉄製品の供出を命じられました。すべて軍用に向けられたのです。バスは木炭車になりました。

「ぜいたくは敵だ」、「ほしがりません勝つまでは」が、国民の合言葉となりました。

健康な男性は、兵隊に出され、残された女性や老人、子どもまでが、食糧増産に空腹をかかえて働きました。運動場や道路にも、いもや麦が植えられました。

空襲が激しくなるにつれて、和歌山市では「建物疎開」がはじまりました。火事を防ぐためです。市民は住む家さえこわされるのを見ていなければなりませんでした。



食糧増産のための開墾（上富田町）

学徒出陣

太平洋戦争で負けそうになってきた1943年、旧制の中学校や高等学校の卒業が1年早められました。また、大学生や専門学校生の徴兵延期の制度も中止となり、一般の男性と同じ扱いになりました。和歌山高等商業学校や和歌山師範学校（ともに現在の和歌山大学の前身）でも、学問をやめて軍人になる学生も出てきました。

男性が20歳になると兵隊になる義務は、1年下げられて19歳となりました。さらに、1944年には満17歳以上の男子が兵役に加えられるようになりました。中学校の生徒は飛行予科練習生などの募集にも参加しました。多くの青少年はペンや銃を手に持ちかえて、戦場へと向かったのです。

勤労働員

日中戦争がはじまった翌年の1938年、政府は学徒に食糧増産への動員を求めました。戦争が激しくなる



につれ、国民学校（小学校）4年生以上の児童生徒も食糧増産、草刈りや堆肥づくり、荒れ地の開墾などに動員されました。

1944年には、中学校、国民学校高等科以上の学生は軍需工場で働くように命じられました。その翌年の4月からは国民学校初等科以上の上級学校は、すべて通年動員され学校は閉鎖されました。生徒は工場や駅、港の荷物運び、農家の手伝い、防空壕掘りなどの仕事にあたりました。

戦争が激しくなり、熟練工が次々と出征したため、工場では労働者が不足しました。そのため、政府は法律を定め、中等学校の4年生以上の男女生徒は授業を中止して工場で働くようになりました。和歌山師範学校や県内の中等学校の男女生徒が明石（兵庫県）の航空機工場をはじめ、各地の工場や造船所などに働きに出ました。

動員先の工場で爆撃を受けた田辺家政女学校の女子生徒11人がぎせいになるなど、死傷者さえ出しました。食糧事情も悪くたいへん苦しい仕事でしたが、勝利を信じて兵器生産に励みました。

また、軍人以外にも、軍属として召集され、工場などで働く人も大勢いました。こうして、すべての国民は戦争のために協力したのです。



灯火管制カバー
（海南市教育委員会蔵）



奉公袋（個人蔵）



防空鉄かぶと
（海南市教育委員会蔵）

和歌山大空襲

米空軍機B29は、1944年11月に西牟婁郡，翌年1月には東牟婁郡などの村々に、つづいて太地町や新宮市などに爆弾を投下しました。その後、8月15日の終戦の日までの間に和歌山県下に200回以上の空襲がありました。

なかでも、1945年7月9日の真夜中から始まった焼夷弾投下の和歌山市空襲は最大のものでした。翌日の10日まで燃え続け、市の中心部のほとんどが焼け野原となりました。焼けた家27,000戸以上、死者1,200人、負傷者4,400人を越えました。特にすさまじかったのは、汀丁の旧県庁跡の広場（現在の供養塔のある公園）でした。押しよせた炎で火柱が立ち、ここに逃げ込んだ700人以上の人々が焼死しました。この空襲で死亡した人の約60%にあたります。このときの空襲は和歌山大空襲とよばれています。

死を逃れた人々の中には、親戚や知人をたよって和歌山市から離れていく人もいました。また、紀ノ川の河原や鉄橋の下などで、バラック住まいの不自由な暮らしをつづける人もありました。

こうした多くの人命と物資を失った和歌山市民ですが、戦争が終わって平和が訪れると、やがて復興に立ちあがりました。



大空襲により焼け野原となった和歌山市内 百貨店屋上から写されたもので小高い山の上には和歌山城がありました。（毎日新聞社提供）

*1 仮りの小屋をたてて、住んだこと。